

〈論文〉

## 多民族・多文化社会体験による意識変容と自文化再発見 —シドニー短期交換留学研修を例として—

熊谷 ユリヤ

### 1 目的と背景

本稿は、短期留学準語科目を経て、多民族・多文化社会短期間に体験・観察した異文化接触が、大学生にもたらす意識変容と、その結果としての彼らの自文化再発見について述べるものである。

札幌大学経済学部では、2008年より毎年夏休みに、オーストラリア、シドニーの協定大学、University of Technology, Sydney (UTS) の短期留学プログラム Intensive Exchange Program (IEP) に参加している。学部予算および学内の経済・経営学会補助金と、UTS との授業料免除の交換留学協定のお陰で、2010年までの三年間で各年数名の他学部生を含む60名の日本人学生が低価格の負担で参加している。著者はUTSとの連絡、コーディネーター、引率と、留学準備科目「海外事情研究」を担当している。

「海外事情研究」では、大きく分けて三つの面で準備を行う。まず、英語力としては、クラスルーム英語、ホームステイ英語、そして自由行動に必要となるサバイバル英語。第二に、現地事情と、異文化コミュニケーションと多文化社会に対する予備知識を身につけること、第三に、受け入れ先での集中的な講義、課題を、学校代表として乗り切るための学習態度を要請することである。

UTS-IEP の特色は、教室での講義やホームステイ、社会観察を通じて英語「で」オーストラリアの多文化社会と文化を学び、滞在中の観察結果と合わせてレポートや口頭発表をすること、および、日本学を学ぶ現地学生との交流にある。通常の語学留学のような英語「を」学ぶことが目的のではなく、上記の目的に向けた準備のために英語を使いなが

ら学ぶことになる。

IEP 参加には英語スコアの条件が含まれておらず、多くの学生の英語力が英語「で」学ぶレベルに達していない。その障壁となる言語ストレスを軽減し限られた期間で効率よく成果をあげる目的で、必要に応じて、引率教員が IEP のネイティブスピーカー教員と連携しながら、オリエンテーションや、多文化・移民・教育・環境・生態系等の講義の要約通訳を行う。通常の語学留学とは異なり、大学での一学期分の科目群を三週間に凝縮して行うプログラムのため、授業は計 60 時間である。

それに加えて、放課後、昼休み、学生によっては週末にも、現地学生との交流や聴講が行われる。相手は、日本留学を目指すボランティア学生や、留学生と現地学生の交流の場として開設されるネットワークカフェで知り合った学生達であり、時間を区切って交互に英語と日本語で交流する。

これに対して、ホームステイは、全く日本語を話さないファミリー宅であり、IEP で学んだ多文化知識を観察・実践する場として位置づけられている。学生たちは毎日ホームステイで発見した事を日本文化や事象と比較して写真入り日記として記録し、毎週課題として IEP 教師に提出する。

2008 年は 14 名、2009 は 25 名、2010 は 21 名の計 60 名が参加し、春学期の「海外事情研究 I-A」を通じて留学準備を行い、三週間の IEP およびその前後を含むホームステイ期間中は、引率教員が 24 時間、対面および携帯電話通訳・カウンセリングのために待機している。

文化人類学者 Edward T.Hall は、コミュニケーションの様式が「高コンテクスト」(high context から「低コンテクスト」(low context) のスケールの中でどの位置にあるかに基づいて、各国の文化的コンテクスト度の高低を測定した。高コンテクスト文化におけるコミュニケーション様式では、社会的文脈に大部分の要素が既に組み込まれている、あるいは、その文化圏内の思考形態や行動様式に内在しているため、言葉や文字による明確な表現主張は不要となる、あるいはあえて避けるようになり、状況に基づいた「察し」を良とする傾向があると考えられる。Hall は、ハイコンテクストのコミュニケーション様式は、集団主義志向の文化に顕著であると述べていて、日本はその代表的な文化である。

ローコンテクスト文化では、共有する文化的文脈を補うため、文字や言葉により明確化された意思や情報が大量に交換される、個人主義的文化に顕著なコミュニケーションである。すなわち、異なる文化的背景を持つ移民や移民の子孫達が共存していく上で必要なコ

コミュニケーション様式であり、アメリカ合衆国やオーストラリアが代表的な例である。

多様な価値観を認める多文化主義政策をとるオーストラリアは、国民の約4分の1に当たる二千百万人が外国生まれであり、国民の殆どが二百以上の国・地域からの移民、または移民の子孫という多文化国家である。中でもシドニーは中国系・ベトナム系などのアジア系をはじめ世界じゅうからの移民が集中する多文化都市となっていて、英語が公用語でありながら、様々な言葉が飛び交っている。そこは、典型的な多文化社会であり、ハイコンテクスト文化特有のコミュニケーションスタイルが絶対的である。

## 2 手法と分析

ハイコンテクストのコミュニケーション様式や多文化社会が短期滞在者にがもたらす意識変容と、自文化再発見を分析する手段としては、設問に対する自由記述式のアンケートを元としている。有る程度海外経験を消化して振り返り、日本と比較できるようになった帰国後2か月から3か月を経た時点で実施された。内容は毎年ほぼ同じで、IEPの各項目、ホームステイ体験、英語、後輩へのアドバイスなど40項目にわたる質問の最後に、「対人コミュニケーション様式の違いについて」「多文化社会について」「短期留学参加の前と後で、考え方や人生観が変わったかどうかについて」という質問が設定されている。各項目毎の代表的な回答例を抜粋し、類似した回答をまとめたものは、以下の通りである。

### 2-1 対人コミュニケーション様式の違いについて

- ・人生観の変化と交流能力の向上が成果だった。日本人同士でも、初対面からフランクに話したり交流が出来るようにすべきだ。日本人特優の人見知りは、国際交流には不利だから。
- ・英語が上手に話せなくても見下される心配はないと分かった。むしろ、片言でもゼスチャーでもいいので、コミュニケーションが大事で、何も話さないと相手にされないと感じた。
- ・現地の生徒との交流は一生の宝になる。もっと友達を作って日本のように表面的な話しやゲームではなく、UTS生のように深い話しをすることが大事。お互いの刺激になる！
- ・大学生と高校生の子供の居るホストファミリーだったので難しい人間関係も多少はあったが、全く文化の違う自分を、日本型ホームステイのようなお客様としてではなく家族

の一員として非常に暖かく迎えてくれた。

- ・英語力の問題ではない。何事も積極的に行動すること、積極的に行い、友達作りをする事が大事。
- ・日本で生まれて育った自分には、馴れるまでは辛かったが、「今日で前半が終わる」と先生に言われて、「遠慮したり恥ずかしがっている場合ではない」と、俄然やる気が出た。
- ・帰国後、よそのグループの悪口を聞くと非常に冷めた感があった。留学で刺激を受けてきたせいか、日本人の内向きコミュニケーションが物足りない感じがした。未だにそう感じることもある。
- ・嫌いなものも一度は試してみて、それでもだめなら、はっきりと「食べれません」と言うようにと海外事情研究で習ったが、そういう態度が何事にも共通すると思った。チャレンジ後、意思表示をすることが大事だ。
- ・自分は内気ではないと思っていたが、振り返れば、行く前は外国人や見知らぬ人との接触を避けていた気がするが、今は多くその様な機会をもちたいと思っている。たくさんの人と触れることのできる機会を最大限に活用すべきだ。
- ・「どちらでも」とか「多分」とか言わずに、自分の意見をはっきり言いなさい」と先生に言われていたが、最初はそこが英語自体より難しかった。でも、世界に出ていくには絶対必要な態度だと段々分かってきた。

## 2-2 多文化社会

- ・どこを歩いても様々な人種の人が出て、様々な言語が飛び交っている。それが普通という珍しい空気を体感できて、日本との違いが知れてよかった。
- ・日本と違って個性があふれていて、一人一人の存在が大きく見えた。可能性と世界が広がった。
- ・オーストラリアで様々な国籍の人と出会い、知り合えたことが私の宝物だと思った。
- ・日本では感じることの出来ない多文化社会は非常に刺激的だった。様々な人種の間が同じ場所共存しているということは、知識では習っていたが、実際に住んでみてとても驚いた。
- ・日本では皆と同じにしなければならぬけれど、多文化社会ゆえに、一人ひとりが違っていいのだという感覚は新鮮だった。現地に慣れるための手助けにもなってくれた。
- ・自由に慣れない分、不便に感じることもあったが、多文化の中で暮らしたことは貴重な体験だったので非常によかった。語学を学ぶことは日本でも出来るが、多文化の感覚はその国でなければ学べない。

- ・白人に漠然とした憧れがあったが、それが劣等感であり差別だということが分かった。アジア系の人と話してみると価値観がとても似ていて親しみを感じた。一方白人の人と話してみると、とても陽気で会話がとても楽しくて見習う点がいくつかあると思った。
- ・考えが違うので、理解できないことが多くある。特に食事の味が無いことが理解できなかったが、個人が塩コショウで味付けする自由を与えるためと聞いて、考えさせられた。
- ・「ビュッフェの料理を取りに行く時やトイレに行くような些細な合間にも、貴重品は必ず身につけ行動すること」「お財布は見せない」「飲みかけのグラスを置いて席を立たない」という注意を守っていたので被害にあわなくて済んだ。一つ一つの行動に意識を持ち、気を抜かないことなど、安全な日本では信じられないような注意が必要だった。それ以外では、多文化社会は楽しいことばかりだった。
- ・多様な文化、考え方、習慣に触れることができ良い経験になりいた。でも、移民ではなく日本人だから良くしてもらったのかも知れない、アジアでも他の国から人達は、危険な地域に住んで、きつい労働をしている人達が多いことにも気がついた。
- ・多文化というと、ただ国際的がかっこいいと思っていたが、良い点だけでなく悪い点もあることが実感できた。普通だと思っていた日本の暮らしがどれだけ安全で裕福なものなのかがわかった。
- ・数人の白人に罵声を浴びせられたが、何もしていなかったので、アジア人であることに對する事だったと思う。法律では平等とされていても実は色々な人がいる。無視すればなんともなかった。
- ・多文化社会という事で、様々な文化や風習に触れる事が大いにできた。日本では得られないものが、海外にはある！日本でも内輪の人と話だけでなく、様々な立場の人々と交流すべき。
- ・多文化社会に触れて、本当に自分が今まで思っていた世界とは全く違うもので色々な事を肌で感じる事ができ、視野が広がったと思う。色々な国の人が居るオーストラリアでそれぞれの国の習慣、文化、食べ物などを直接体験してことはすごく良い刺激となった。
- ・みんな陽気な感じで初めて話す相手でもすぐに仲良くなれた気がする。日本では誰かと知り合っても一線を引いて本当に良くなれないことがあるが、多文化でそういうのが無い国だった。
- ・多文化社会は貧しい移民や善悪の基準が違う人達がいる。日本人同士だと安心出来るけれど海外では、犯罪に遭わないようにするのも、自己責任の社会だ。多人種や多文化が共存する社会は理想的だけれど、代償がある。その点、日本は日本人にとって住みやすい。

### 2-3 留学前後での変化

- ・たった一ヶ月弱の留学。だが、海外での異文化体験の無い自分にとって非常に大きな経験になった。
- ・短期留学であっても長期旅行と違って「一般家庭に住み現地校で学ぶ」ので、その土地の特色や生活が体験でき、未来の方向性として、世界が広がった。一生の思い出になったという気持ちが日に日に強くなる。
- ・留学前まではすごく仲良かった友達との価値観のずれを感じた。前はそれ程気にならなかった差別的な発言がすごく嫌で、そのことをはっきりと口に出して伝えた。
- ・日本が特殊な社会ということが実感として分かり、多文化に興味を持つこともできた。将来は多文化社会に身を置いて、生活したいとも思った。
- ・自分が無知なことを強く感じた留学だった。いかに自分が日本の事を知らないのか、日本文化や日本人であることに誇りを持っていないかを思い知らされた。
- ・日本人特有の集団行動の義理や遠慮があって、もう2度と経験できない海外経験の機会をいくつか逃してしまった。海外にまで日本社会を引きずっていく必要は無いと先生に言われていたのに。この後悔は、人生でも相当貴重な教訓になると思う。
- ・自国の文化と比較し、客観的に両方の文化の良し悪しを自分の生活の中に取り入れ改善することが出来る。
- ・将来に影響を与えることになる体験をした。もっと色々な文化や歴史を知りたいとか、学習意欲の向上にいい機会となった。特に自国についてをよく知っておくべきだ。
- ・知識がないと何も会話が弾まないし、他国のの方が日本についてよく知っているという恥ずかしい事態も起こった。それに平行して他国の文化をあらかじめ知っておくと、海外で恥や迷惑をかけなくて済む。
- ・かなり変わった。ポジティブになり、少し良い意味でドライになった、現地の大学生が高いモチベーションや将来への希望を持っていることに感化され、やりたいことは突き進もうという考えに変わった。
- ・新しい環境に行く前はとても悩んでいたが、行って後悔は全くしていないし少しでも興味を持ったことは、絶対にすべきと思えるようになった。しなくて後悔するのよりずっといいと思う。
- ・日本製の車や電気製品やIT製品がなれば世界は機能しないということ、日本が尊敬されていることが分かって、初めて日本人としての誇りを感じれた。
- ・人生観はあまり変わらないと思うが、考え方は変わった。最初は辛かった留学が、帰国間際には生まれてから一番楽しい体験に変わっていったので、何をするにも自信を持つ

て物事に取り組めるようになった。

- ・視野が広がったし、周りの目を気にしなくなった。絶対に絶対に留学した方が良い。それぐらい、大きな変化があった。
- ・日本人は偏見を持ちすぎているなど思った。多文化に住まなければ、そのことに自分も気がつかなかったと思う。
- ・何事も客観的に見て、良い面と悪い面を両方探すように先生に言われていたけれど、良い所、うらやましい所ばかりだった。ずっと住んでみると悪い面ももっと気がつくかもしれないけれど。
- ・自由な感じがとても良い。あなたはあなた、自分は自分、そんな考えがとても良かった。それに、自分の国だけでなく、民族や祖先の文化にも誇りを持っているのが素晴らしい！
- ・自分の中で確実になにかが変わった。留学のお陰で以前より日本の良い所が客観的に見えてきてが好きになった。
- ・留学中は英語や体験で頑張らなければならないことが多かったけれど、やりとげたという感動がある。それに、自主性が生まれて精神的に強くなった気がする！
- ・すごく変わった。人生は楽しくなって、世界のいろいろなことに注目するようになっていた。自由でストレスなく、多民族の人と接することが出来る日本人が増えるといい。
- ・何ヶ月前までは存在さえ知らなかったシドニーの家族や友達が、今でも地球の反対側で生きていると思うと、地球上にはこれから出会うかも知れない未来の友達や家族が生きていると思うようになって、人ごととは思えなくなった。留学に行っていない友達にこれを言って笑われたけれど、行った友達には分かってもらえた。
- ・大きく変わった。世界は広いし、自分が知らないことや、日本のニュースで流れてない事、日本の学校では習うことがないことがたくさんあることに気がついた。
- ・「日本の文化や習慣と比べて変だ！と決めつける前に、何故そうなのか WHY を考えなさい」と海外事情研究の授業で言われたことを思い出して頑張ったけれど、WHY の答えは難しかった。これから何年かかけて答えを探すと思う。

### 3 分析

各設問に対する回答中、直接英語に関係するもの以外では、各学生の英語レベルによる回答傾向の違いは見られなかった。

「対人コミュニケーション様式の違いについて」「多文化社会について」の回答は、留学準備科目の海外事情研究で指導した「安全情報」や「被害に合わないための注意事項」、「ホームステイ滞在の心得」、「海外滞在の心構え」、「ハイコンテキストのコミュニケーションの特徴」についての予備知識の成果が反映されている。

更に、留学中のミーティングでも新たな事例が出る旅に学生から報告させ、了解を得たものについては全員にフィードバックして、繰り返し指導した。事前に海外事情研究の授業で聞いていても、現地で仲間が体験したことを聞いて、初めて実感がわく学生が多かったようであり、新鮮な驚きを色褪せさせる結果とはなっていない。

日本型コミュニケーションが何であるか、日本人の対人コミュニケーションの特徴など、日本には気付かないことも、現地で UTS 生やホストファミリーと交流するなかで、多くの気づきが生まれた。現地の大学の講義についていくには英語力が十分ではないことは自覚している学生が多く、覚悟が出来ていた一方、コミュニケーションのスタイルの違いは、学生にとっては衝撃だったことが分かる。「日本型の遠慮や控えめな態度では多文化社会は生き延びられない」という自覚が生まれた一方、完全な批判には終始していない。

多文化社会についてのコメントでは、その素晴らしさや憧れが多いことは事実であるが、それだけではなく、代償、長所と短所、マイナリティーの立場を冷静に観察できている回答が多い。これは帰国後、有る程度の時を経たためではなく、滞在中の発言とも一貫している。

留学中に繰り返し認識させたことは、多文化社会に関しては、多文化主義に至る政策、多文化社会は、異なる人種・民族・宗教・信条・文化・性的志向・価値観の多様性をも認めることであるといった点である。特に毎回異なる言い方で強調したのは、文化比較は優劣や正誤のためのものではなく、どの文化・社会にも、長所と短所は存在するが、その価値観は、文化内で育った人と外部からの訪問者や移動者それぞれにとって異なるという点である。

IEP の講義で聞く、移民や多文化社会の解説で得た新たな知識と相まって、準備講座や

ミーティングで共有した予備知識は、とすれば表面的な事象のみを見がちな短期研修期間中でも、学生達が、短期留学から最高の結果を引き出すためには有用であった。

「短期留学参加の前と後で、考え方や人生観が変わったかどうかについて」という設問に対しては、「大きく変わった」と回答した学生が60人中44人、「変わった」が9人、「少し変わった」が3人、「変わらない」が4人だった。

引率者としての観察からみて、帰国直後にこのアンケートを実施していたなら、「大きく変わった」「変わった」という回答が多かったと思われる。しかし、一定の期間を経てこのような回答が多かったこと、更に、将来への展望・決意を込めた回答も多いこと、地球市民としての自覚が目覚めたこと、滞在中や帰国直後では頻繁に聞かれた日本批判や日本社会への不満もおさまって、自分の人生観や考え方に客観的な視点として根付いていることが特徴的である。

いずれの回答においても、今まで漠然と存在すると分かっていただけの異文化や多文化社会を目の当たりにして、あるいは、比較することにより、外側から日本を客観的に見た、「気づき」「開眼」「比較」が特徴的である。これは、あくまでもより多くの「気づき」を誘導する上での指標となったと思われる。

#### 4 考察と結論

学生達が、短期留学にも関わらず、より深い視点で客観的に受け入れ先の多文化社会を観察・考察し、日本とは異なるローコンテキスト文化のコミュニケーションスタイルと自国のハイコンテキスト文化を比較することが理想である。更に、帰国後、逆カルチャーショックが収まった時点で、短期留学を振り返って、自分の意識の変容を確認し、将来の生活や人生に役立てるためには、事前知識、現地での気づき促進、帰国後のアンケートやレポートによるフォローが不可欠である。

本稿では、焦点を「異文化体験」「自文化再発見」「気づき」に絞るため、英語力の伸びや語学力に関連した、コミュニケーションの苦勞に関するアンケート項目への回答は省いた。英語圏への短期留学研修の成果は英語の面でも多大であったが、それだけではない。

むしろ、「世界の中の日本」「日本人という地球村の住民に必要な自覚」という面で、最高の結果を引き出すことに成功したと思われる。

海外滞在や異文化接触により意識変容がおこり心理的異文化適応が促進されることを Berry & Sam は、1997 年に指摘している。“Integration,” “assimilation,” “separation,” “marginalization” という四つの異文化適応ストラテジーのうち、自分の文化を維持しながら、新しい文化も受け入れ、意識を変容させていく “Integration” つまり「統合現象」と自文化再発見」の成果が、IEP 参加者のアンケートから見えて来た。

“Culture Shock”（「文化衝撃」）は人類学者の Kalvero Oberg が（1960 年に提唱した概念であり、外国に移動した多くの人が経験する、指向性の喪失や不安感が精神的・肉体的症状となって現れるもので、本来否定的な要素をさすことが多かった。しかし、Adler（1987）は、Culture Shock を、「自己認識と成長をもたらす深い学びのプロセス」と位置付けた。それは、自己理解と意識の変容に至る、異文化の理解の経験である。

異文化体験の衝撃、すなわちカルチャーショックを体験しつつ新文化に適応していくプロセスのモデルに、U 字カーブと W 字カーブがある。Lysgaard が 1955 年に提唱した U 字曲線モデルによれば、入国直後の「初期ショック」、新たな異文化生活に対する高揚と違いを肯定的にとらえ積極的に適応しようとする「ハネムーン期」、そして、次第に馴れてくるにつれ周囲に対する視野が拡大するにつれてストレスと不満とホスト社会に対する批判が高まり、落ち込み現象が起こる「移行ショック期」、そして「回復・安定の時期」へとこの過程を辿る。

Gullahorn & Gullahorn 提唱の W 字カーブは、自国と異なる文化での適応プロセスを示す U 字カーブと、帰国後の自文化に再突入し再適応する U 字カーブ合わせ、全体の適応プロセスを  $U \times 2 = W$  としたモデルである。

三週間の IEP とその前後の数日間という短期留学研修プログラムは、通常の長期留学または一年間の交換留学における異文化適応のプロセスから見れば、到着直後の初期ショックかハネムーン期で帰国することになり、ともすれば表面的な体験に終始すると思われるがちである。引率者の観察やアンケートの他の部分から引き出した各週の適合状況は以下の通りである。

一週目、学生たちは、受け入れ先協定大学でのオリエンテーション、講義、地元学生、通学や地元の方向感覚と位置感覚を把握し、ホストファミリー宅にあっては、家族と知り

合いになる。どんなに英語や現地情報を準備してきても通じなかったり、迷子になったり、などのハプニングが起き緊張している時期である。大小のカルチャーショックを体験する時期でもある。一週目後半になって、日記の課題を提出する段階になり、到着直後に比べていかに適応したかを自覚して、ハネムーン期に移行するケースが多い。

二週目は、聴講や交流を通じて UTS 生の友達も増え、多くのホストファミリーが学生を色々な場所に連れて行き新しい体験をさせる。学生は一週目に感じていた時差ボケや緊張間や旅の疲れから回復し、本来の滞在の目的に注意を向けることができるようになる。次第に居心地が良くなる期間。現地での英語学習の成果が表れ始め、英語での理解度が高くなり、話すことに自信がつく。学生は家族の一員となり、オーストラリアの文化や生活習慣をより良く理解し始める。

三週目は、家族との絆が強まり、英語を話すことにはっきりとした進歩が見える。ホームステイの経験は、単なる英語学習の機会だけでなく、オーストラリア社会と文化を学ぶ貴重な機会となる。UTS 生の友達も増えてくる。しかし一方、課題や口頭発表の準備によるストレスが出て、今まで無条件で受け入れて好ましく見えていたものも、客観的に比較できるようになる。一方、一部の学生に重いカルチャーショック症状や深刻なホームシック症状が現れる。コースが終わり、帰国が近付くと、ハネムーン期が復活、あるいは自文化再発見と並行した統合現状が、多くの学生に見られる。

この間の感想は課題である日記や日常の発言には現われているが、アンケートを実施していないため、正確に把握・比較・検討することはできていない。今年からは実施し、途中経過も把握したい。

以上の考察から、通常は長期留学の成果には遙かに及ばないと考えられがちな短期留学も、事前学習、留学中及び帰国後のフォローにより、多大な成果をもたらすことが可能であると言える。特に、多文化・他民族社会体験による意識変容と、自文化再発見の観点からは、絶大な成果が期待できる。

## 参考文献およびウェブサイト

- Australian Bureau of Statistics (オーストラリア政府統計局) <http://www.abs.gov.au/>
- Cabbasa, Leopoldo, "Measuring Acculturation: Where We Are and Where We Need to Go," *Hispanic Journal of Behavioral Science*, 2003, Sage Publications
- Hall, Edward T., *Beyond Culture*, Anchor Books, 1976
- Hall, Edward T., *The Hidden Dimension*, Anchor Books, 1990
- Cultural Psychology*, W. W. Norton & Company, 2007
- University of Technology, Sydney, <http://www.uts.edu.au/international/>